

表紙/高部向館イメージ図 森と地域の調和を考える会  
裏表紙/高部館イメージ図 河西 和文 作図

戦国時代の山城 高部館・向館、  
そして城下を受け継ぐ高部宿の姿を探る

# 中世の高部

たかぶ

茨城県常陸大宮市高部

森と地域の調和を考える会(木の駅プロジェクト美和実行委員会)

常陸大宮市ふるさと文化で人と地域を元気にする事業実行委員会



文化庁平成27年度文化遺産を活かした地域活性化事業

## 「森と地域の調和を考える会」の取り組み

私たちは、美和地域にある豊かな「自然」、日本の原風景の「里山」、地域内に残る「歴史的価値遺産」を地域の宝(資源)として位置づけ、それらを活用し「地域主体(住民の力)による地域振興活性化」に取り組んでいます。



木の駅プロジェクト美和



高部館整備事業



薪製造事業



森林教室(間伐体験)/美和小学校



岡山邸庭園(養浩園)整備



歴史探索ツアー

## 森と地域の調和を考える会

龍崎 眞一 川野 和彦 大森 豊 堀江 克己 河西 和文 薄井 均 清水 浩

TEL.0295-58-3812 <http://miwa-mori.wix.com/miwa>

『中世の高部 一戦国時代の山城 高部館・向館、そして城下を受け継ぐ高部宿の姿を探る一』

発行 森と地域の調和を考える会 (代表 龍崎 眞一)

編集 山川 千博 (茨城大学中世史研究会)

イメージ図 河西 和文 (森と地域の調和を考える会)

デザイン 大高 泰弘

発行日 2016年3月1日

四百年の  
時を越えて残る  
迫力ある遺構

# 高部

中世に始まる高部館・向館・高部宿  
今に残る城の遺構、宿の歴史的建物から  
この地域の歴史を考える

常陸大宮市高部地区では、近年、市民を中心に「森と地域の調和を考える会」が発足し、常陸大宮市教育委員会や茨城大学中世史研究会の協力を得て、地区にある文化遺産を活用するための、整備事業を進めています。

すでに平成二六年度には、高部字館山に所在する「高部館跡」の草刈り整備を行い、茨城大学中世史研究会に依頼して縄張調査を実施しました。その結果、これまで草に埋もれていた地表面遺構を確認し、高部館跡が東麓の宿を守るように、西方の那須方面への防御に特化した構造をもつことが明らかになりました（「森と地域の調和を考える会編二〇一四」）。

それに続き今年度は、高部館跡から緒川を挟み南側に所在する「高部向館跡」の整備・調査を実施しました。本事業は、「常陸大宮市ふるさと文化で人と地域を元気にする事業実行委員会」が主催する「文化庁平成二七年度文化遺産を活かした地域活性化事業」の一環として行い、高部向館跡の縄張調査は前年度に引き続き茨城大学中世史研究会に依頼しました。その結果、戦国時代の高部地区では、高部館・高部宿・高部向館が一体となり存在したことが、明らかになりました。

本書は、当会のこれまでの整備・調査事業の報告書です。本書の構成は以下の通りです。

- 一、森と地域の調和を考える会の取り組み……………2頁
- 二、高部館と高部宿……………3頁
- 三、高部向館の構造……………7頁
- 四、高部地区の文化遺産……………9頁

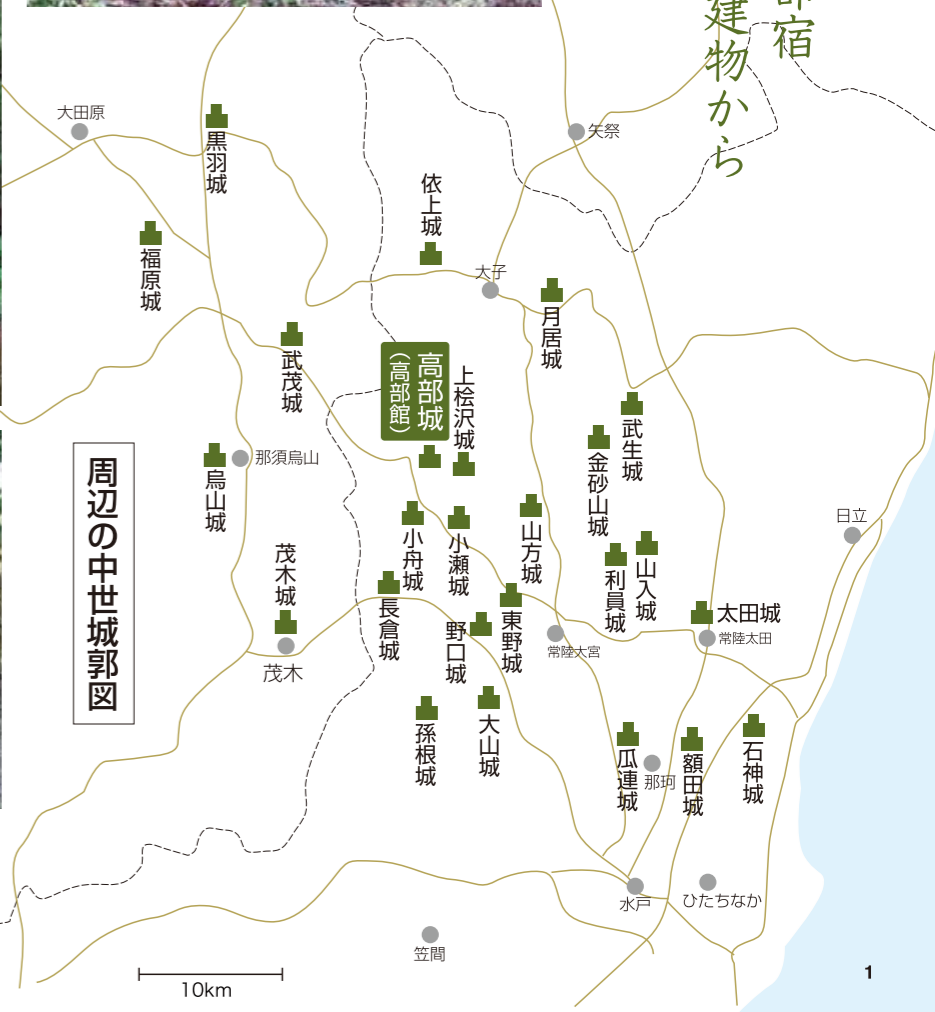
なお、執筆は一・四を龍崎眞一（森と地域の調和を考える会）が、二・三を山川千博（茨城大学中世史研究会）が分担し、山川が編集しました。

## 一、森と地域の調和を 考える会の取り組み

平成二四年四月に、地域の衰退に危機感を持ち、地域団体（森と地域の調和を考える会）を結成し、「地域主体（地域の力）による地域活性化」に取り組んでおります。活動コンセプトは、「地域資源を活かした地域活性化」であり、この地域にある、「豊かな自然」、「日本の原風景里山」、「地域に残る歴史的価値遺産」などを、地域特有の資源（宝）と位置付け、それらを活用し過疎地域の活性化を実現する為に活動を継続しております。

これまでに、豊かな森林資源を活用し、森林の荒廃対策と商店活性化の効果が期待できる「木の駅プロジェクト」と美和を中心に、広葉樹を活用した「美和の薪製造販売事業」、子供たちへの「森林教室」、古い街並みを保存修復する「街並み保存事業」、地域に魅力を発掘・発信する「お宝マップ美和製作事業」、中世の山城「高部館整備事業」、その他各種イベントを実施して参りました。

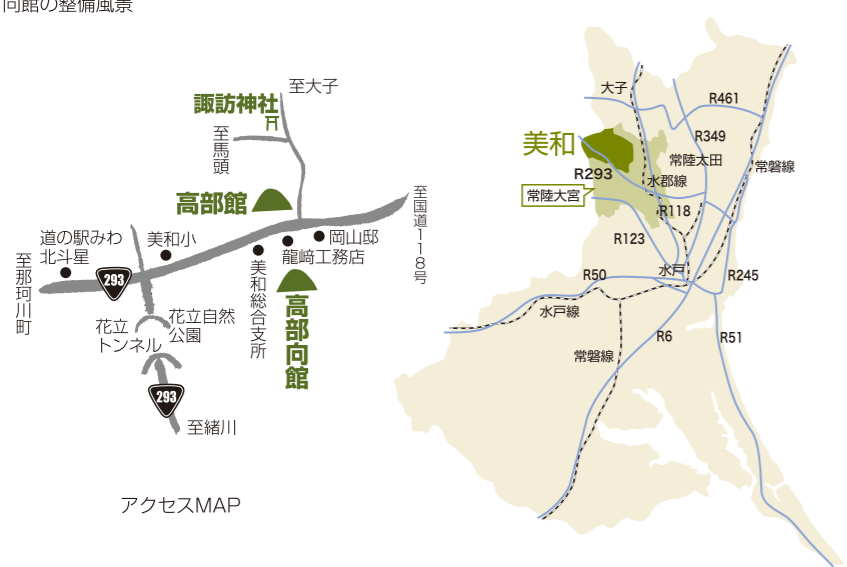
この事業は、「高部館整備事業」の一環とした取り組みであり、当地域に点在する七つの山城と四つの向館遺構を、未来に継承する文化遺産（宝）として位置付け、平成二五年六月から、当会が中心となり整備を開始しました。今年度は、新たに高部向館を整備し、戦国時代築城の高部館・向館・高部宿の惣構の姿が残る貴重な地域として、「中世の高部」と題したパンフレットを作製しました。地元の方々が自分たちの暮らすこの場所の歴史的価値を見直し、この地域以外の方々がこの地域に関心を持つ機会になれば幸いと考えております。



高部館歴史探索ツアー



高部館・向館の整備風景



# 二、高部館跡と高部宿

## (一) 高部館の歴史

高部館は、中世後期に常陸国北部を領した佐竹氏の軍事行動に、大きく関わる城郭遺跡です。館は、山方・上檜沢方面から鷲子・烏山に抜ける東西道と、和田川沿いに北上して大子・馬頭へと到る南北道がT字に交わる地点の、標高約二九〇メートルの山頂に築かれています。

高部館の歴史は、南北朝初期に佐竹義胤の五男景義が高部の地を領して高部氏を称し、館を築いたのが始まりとされます。景義の事績については不明な点が多いのですが、少なくともこの時期に、佐竹一族が、高部を含む常陸国北西部の山間地域に勢力を伸ばしていたことが、近隣に伝わる古文書や棟札・宝篋印塔・梵鐘の銘文などから窺えます。

一五世紀代、佐竹氏は有力一族である山入氏と争います（佐竹の乱）。その際、高部館は山入氏方の拠点となりました。正長年間（一四二九―一三〇年）、高部氏は近隣の檜沢氏・高久氏とともに山入氏に味方して攻められ、それ以降は佐竹本家に従ったといえます（「高部氏系図」）。時代は下り十六世紀の初頭、山入氏義が高部館を奪い、佐竹義舜に対して最後の抵抗を試みましたが、かなわずこの地で滅亡したと伝わります（「義舜家譜」）。

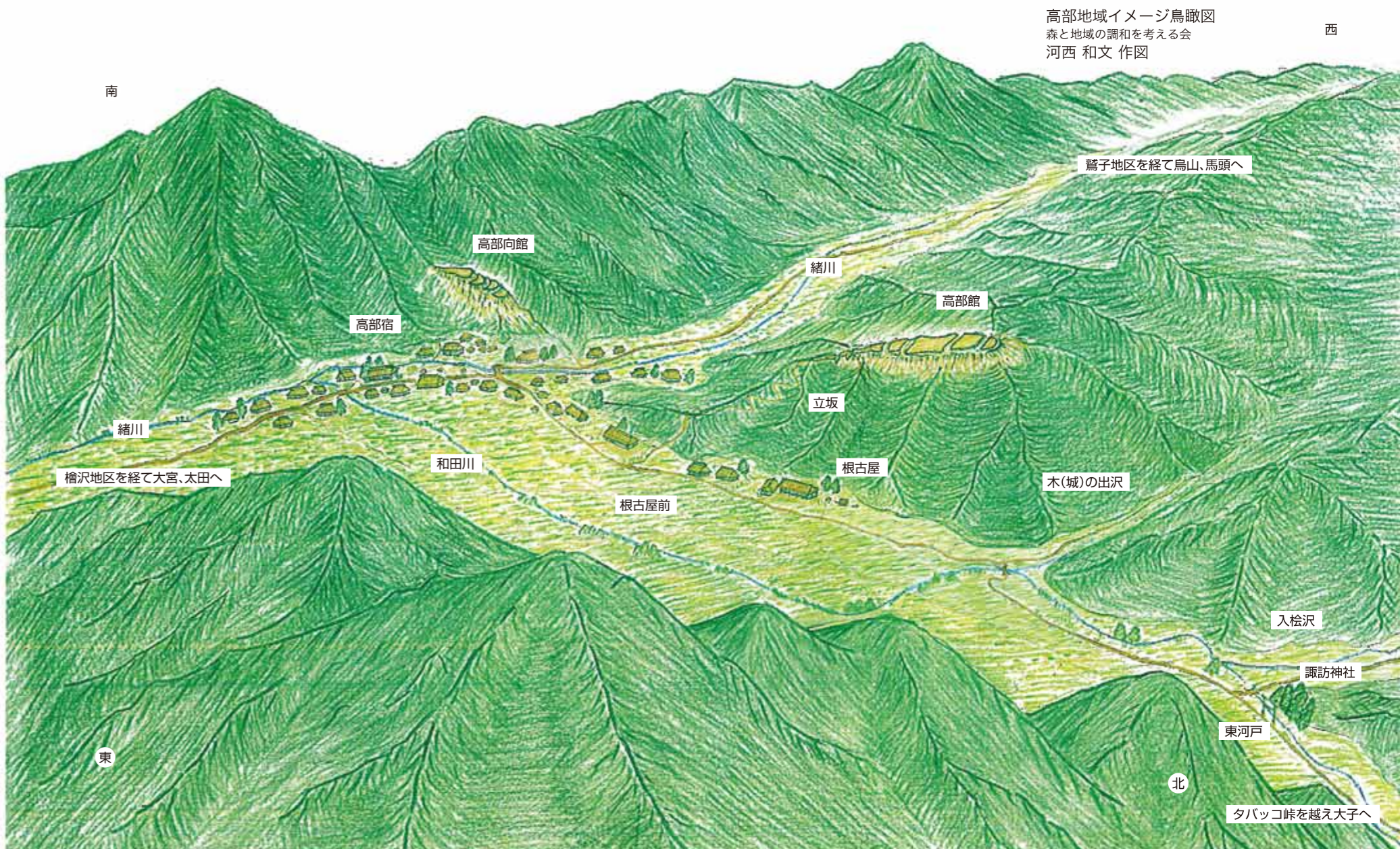
こうして佐竹の乱が終結した後、高部館は下野国への進出を目指す佐竹氏の境目を守る城として、対那須氏（烏山城主）の前線基地となりました。高部の地は、佐竹氏の有力一族である東家の所領となり、高部館には大縄氏等の代官が配されます。その下で「高部衆」という集団が組織され、従来の高部氏も東家に仕えてその一員となりました。

現在残る高部館の遺構は、この時期のものだと推測されています。高部館の縄張図（左頁）をみると、城域の北端から南端まで、西に向けて曲輪や堅堀・横堀が配されており、高部館が那須方面からの攻撃に備えていることがよくわかります。西側から城内に侵入した敵に対し、より長く堀底の道を歩かせ、その間に敵を疲弊・殲滅させるという構造をもつ事が、高部館最大の特徴です。

那須氏と抗争中の天文年間（一五三二―一五三三）、佐竹義篤は烏山方面への出兵に際し、配下の土豪・代官等の一族郎党のほかに、「一向ふせう（不肖）の者とも」<sup>11</sup>武士ではない人たちまでを、残らず動員しました（「大縄文書」）。このことから、佐竹氏によって編成された「高部衆」の中には、地域住民の一部も含まれていたと考えられます。



高部地域イメージ鳥瞰図  
森と地域の調和を考える会  
河西 和文 作図



## 《系図》高部氏略系図

